



もみじ

明るく のびのび 遊ぶ子ども

令和3年 6月 1日

園だより No.3

新潟市立新津第一幼稚園

本物の幼小連携によって育まれること

園長 間嶋 哲

「こんなこと教えていないのに、一体いつ学んだのだろう？」とか、「自分が使う言葉や、よくやる行動パターンが、何だか似てきているなあ」とか、自分のお子さんを見て思うことはないでしょうか。

私自身も、我が子は言うに及ばず、クラス担任をしていたときなど、同様のことを感じていました。

1950年代後半に行われた有名な心理学実験で、『ボボ人形実験』というものがあります。カナダの心理学者アルバート・バンデューラが行った実験です。子どもを3つのグループに分け、Aグループには、空気で膨らませたビニールの人形ボボに、大人たちが攻撃的な行動（叩く・蹴るなど）を行う映像を見せます。Bグループには、攻撃的な行動はせず、他の玩具で遊んだり静かに過ごしたりする映像を見せます。Cグループには、映像を全く見せません。その結果、Aのグループの子どもは、BやCのグループと比べ、その後、ボボ人形に対して、大人がしたのと同様に攻撃的な態度をとることが多く見られたのだそうです。

子どもは、ロールモデル（具体的な行動や考えを学習・模倣する対象）を、無意識のうちに選びます。当然、身近な人（家族や教師）が、そのモデルとなりやすいことが知られています。これが、人は他者の言動を見るだけでも学習するという『モデリング理論』です。

よく「幼小の連携」という言葉が使われます。私も新津第一小学校・幼稚園に赴任してから、早2か月が経ちました。日々「本物の幼小連携とは、こういうものなのか」と感心しています。

先日行われた小学校の運動会では、全校児童の応援席前の特等席（！）で、横一列の椅子に座って応援する園児たちが、輝いて見えました。何気なく国旗掲揚塔を見ると、何と園児手作りのこいのぼりが悠々と泳いでいるではありませんか。驚きでした。運動会の中身としても、プログラムの一部に幼稚園児が「参加させてもらっている」のではなく、園児が行う表現活動に小学生や小学校教諭も参加したり、低学年の興味走にも混ぜてもらったりするなど、まさに小学校の運動会に「溶け込んでいる」のです。

しばらく前のことですが、年中以上の子どもたちは、小学校の屋上につながる長い階段を登りながら、屋上からの新津の景色を見ました。そこから「ヤッホー」と声にすると、小学生もしっかり「ヤッホー」と返してくれます。また、五年生が稲を栽培している田んぼにおじゃまして、水生生物の収集をしていたこともありました。このような『本物の幼小連携』が日常的にできる園児たちは、とても幸せです。様々な活動で出会う全ての小学生が、園児たちにとっての良きモデルです。



